

近世初期の歌枕を中心とした京都見物

— 石出常軒『所歴日記』を事例として —

谷 崎 友 紀

- I. はじめに
- II. 資料・方法
- III. 京都における石出常軒の名所めぐり
 - (1) 滞在中の行程について
 - (2) 名所に関する記述の分析
- IV. 常軒の行動にみる歌枕への関心
 - (1) 歌枕をめぐる際の特徴的な行動
 - (2) 常軒が参考とした資料の検討
- V. 近世初期の知識人による名所めぐり
- VI. おわりに

I. はじめに

本研究では、近世初期に京都を訪れた知識人である石出常軒の記した『所歴日記』(1664年)を用いて、常軒の京都内での名所めぐりを復原することで、彼がどの名所を選定し、そこでどのような見物を行っていたのかを明らかにする。このことを通じて、近世初期における知識人による歌枕を中心とした名所めぐりや名所への興味関心の背景に関して、同時期の『千種日記』との比較検討も踏まえて言及することにした。

近世初期になると、全国的に街道や宿場の整備が進み、多くの人々が遠方への旅に出られるようになった。寛永15(1638)年には、同年の夏から翌年の春にかけて伊勢への集団参宮が記録されていた¹⁾ことからそのことがわかる。その旅の目的は伊勢参宮にあった

が、参宮を終えた人々は復路の道中各所で名所めぐりを行っていた。そして、旅人のなかには、自身の旅の記録を旅日記²⁾として記す者も数多くいた。そこには、それぞれが訪れた場所や宿泊地が記録されているほか、詠んだ歌や訪れた場所の感想が記されたものもある。

こうした旅日記は、旅の経路や旅人の行動を復原する際に利用され、それによって近世の旅のあり方が論じられるようになった。そのひとつは、近世の旅が娯楽的であるか、宗教的であるかをめぐる議論である。例えば小松³⁾は、人々が伊勢参宮を終えたのちに奈良・大坂・京都をめぐったり、豪華な食事や遊興を行っている記述があることから、参宮後の旅路は娯楽的な要素が強まると指摘する。また、桜井⁴⁾は、東北地方から出羽三山や伊勢への旅程を検討し、本来の目的地だけではなく、道中の社寺へ立ち寄る行動から当時の旅の娯楽的な性格を見出した。関東地方から伊勢への旅日記を検討した小野寺⁵⁾は、参宮後に金毘羅山へ参詣したり、安芸・岩国まで足を延ばす人々が増加したことから、1800年頃に旅の娯楽性が強まったと述べている。さらに、西国巡礼者の旅日記を対象とした田中⁶⁾の研究においても、宗教的な要素の強い巡礼に際して、霊場以外の社寺旧跡をより多くめぐる新たな経路が定着したことが指摘された。つまり、伊勢参宮と同様に、西国

キーワード：旅日記, 京都, 近世, 和歌, 名所

巡礼にも宗教的な要素ばかりではなく、娯楽的な要素が認められよう。これらの既往研究は、いずれも旅人が目的地のほかに他の社寺旧跡に立ち寄っていることから、近世の旅は物見遊山を中心としており娯楽性が強いと主張する。これに対し、岩鼻⁷⁾は、そのような短絡的な捉え方に疑問を呈した。その理由として、旅日記に宗教的な儀礼をあえて記さなかった可能性を挙げている。

当時、旅の目的の多くは伊勢参宮であり、また西国巡礼や社寺参詣もその道中に盛んに行われていた。したがって、近世の旅は本来的には宗教的な要素を含むものだといえる。しかし、近世中期以降、さまざまな旅人が増加することで、旅に娯楽的な要素がより多く含まれるようになったのは間違いない。おそらく旅人のなかには、信仰心の篤い者から遊興を目的とした者まで多様な人々がいたと考えられるため、一概に近世の旅全体を通じて宗教性や娯楽性について断定するのは困難である。ただし、重要な点として、旅日記に基づき旅の経路復原を試みることで、近世の旅が娯乐的であるか宗教的であるかの判断は別にして、当時の旅の様相や旅人の興味関心を議論できるようになった。

上記で取り上げた近世の旅の経路復原に関する既往研究は、いずれも旅人が出発から目的地を経て帰着するまでの広域なものを対象としていた。そこでは、主に地方の農村から伊勢参宮を目的として旅立った者の旅日記が用いられてきた。しかし、当時の旅には複数の目的地が存在し、それぞれの目的地で数日間、長い場合で10日間以上滞在し、名所めぐりなどを行っていた。例えば伊勢参宮の場合をみても、先述したように、主目的となる伊勢のほか京都や大坂などに道中立ち寄っている。つまり、当時の旅の様相を明らかにするためには、既往研究が主に対象としてきた旅の経路の分析だけではなく、目的地となる旅先で旅人がどのような関心を持ち、どの

ように名所をめぐるかといった分析も重要となる。高橋⁸⁾や廣瀬⁹⁾の研究によると、京都内における旅人の見物行動に関して、西国巡礼を行っているか否かによって見物の経路や順序が異なるため、訪問する名所にも差異が生じるとされる。このような研究から示唆されることは、旅人による旅先での見物行動にも、彼ら自身の信仰心や興味関心などが強く反映されるということである。

このように考えると、上記の研究はいずれも東国の農村を発した者の旅日記に限定されている。しかし、当時はさまざまな人々が旅に出ているため、旅人のなかには農民だけではなく、都市の武士や商人も含まれていた。居住地や身分・職業が異なれば、物事に対する関心や知識、教養にも違いがみられるはずである。とくに教養のある人々は、文化を牽引する立場にあり、そうした人々に特徴的な名所めぐりがあるものと考えられる。このような違いに着目するため、既往研究では、「知識人」とその他の庶民層という枠組みが採用され、分析がなされてきた。一般的に、知識人とは学者・歌人・俳人などを指している¹⁰⁾。本研究でも同様に、このような学問・和歌・俳句など文化的な知の伝統を選好する人々を知識人と定義し分析を行う。旅人が知識人か否かは、知識量や身分・職業などで区分されると考えられるが、それを明確に定義するのは難しい。しかし、こうした枠組みで当時の旅人を区分することで、知識人の見物行動に関する次のような知見が得られている。

鎌倉を訪れた旅人の行動を分析した原¹¹⁾によると、知識人は鎌倉に対する深い歴史的知識を持っており、鎌倉を武家の聖地だと認識していた。そのため、彼らは、鎌倉全体をくまなく訪れる「三所巡り」を行っていた。一方、それ以外の人々は鎌倉西部の主要名所のみに行動範囲が偏っていた。場所に対する背景知識の有無やそれによる認識の違いが、両者の見物行動が異なる結果となったのであ

る。また、渡部¹²⁾は、越後を訪れた旅人の属性に着目し、出版物に記載のある「燃水(石油)」や「火井(天然ガス井)」などの「越後七不思議」を訪れる知識人と、親鸞と高弟24人の史跡をめぐる「二十四巡拝」を行うそれ以外の人々との差異を検討した。その結果、当時の知識人は博物学的な知識を持っていたことから、その他のいわゆる庶民層と比べて定型化することのない行動をとっていたことが明らかとなった。拙稿で対象とした京都の事例でも、旅人の行動に次のような属性による差異が認められた¹³⁾。それは、知識人が古歌・物語に関連する名所の多い嵯峨を積極的に訪れる一方、それ以外の庶民層は西国巡礼の札所や、観音信仰や稲荷信仰など信仰の中心である名所をめぐるような定型化した行動をとっていたことである。京都において、知識人は古歌の詠まれた歌枕の地や文学作品の舞台を訪ね、そこに表象された風景を実際に見ることに意味を見出していた。

こうした知識人による名所への興味関心は、もともとの個人の教養的なものによるだけではなく、案内記などの書物からの影響も考えられる。18世紀に入ると、実用的な案内記である『京城勝覧』(1706年)や大版の『都名所図会』(1780年)が出版された¹⁴⁾。こうした複数の案内記をみると、各地の名所の変遷¹⁵⁾や、そこに表象された人々や作者の名所観¹⁶⁾を知ることができる。当時の人々もこうした案内記類から名所の情報を得ていたであろう。しかし、本研究で対象とする近世初期は案内記の出版も未だ少ない¹⁷⁾。当時の京都は、上杉¹⁸⁾のいう歌枕や社寺旧跡といった(過去名所)が数多く存在している場所である。そのなかで、知識人である旅人がどのように名所をめぐっていたのかを明らかにすることは、案内記が広く流通する以前の京都における旅人の名所選択やその方法を理解するうえで重要な意義を持つ。

さらに、京都を対象とした研究では、先述

したように案内記や一般庶民による旅日記の検討に留まっていた。案内記は18世紀以降、庶民による旅日記は19世紀以降のものが多く¹⁹⁾、近世初期である17世紀の旅人の行動はほとんど明らかにされていない。『所歴日記』は、京都を訪れた旅日記のなかでも、名所に関する記述が詳細であり、内容の分析が可能である最も初期のものである²⁰⁾。水江²¹⁾が案内記研究の観点から指摘するように、近世初期は名所に対する認識が、中世的な歌を詠むためだけのものから、近世的な実際に訪れて楽しむものへと変化する時期である。そのため、近世初期の京都を訪れた知識人による旅日記を分析することで、近世初期の名所観に対する認識の変化を実際の旅人の行動と関連づけて把握できる。このことは、のちの京都における知識人の見物行動や名所観を考察していくうえでも参考になる。

II. 資料・方法

本研究で分析対象とする『所歴日記』は、江戸幕府の牢屋奉行である石出常軒(本名、吉深)が寛文4(1664)年の旅を記したものである。彼は、公務の傍ら学問に励み、忌部神道の広田坦齋に師事し、学友の山鹿素行とともに、神道だけではなく源氏物語や国学、儒学を学んだ。山崎闇齋に神道を指導したこともあったという²²⁾。延宝3(1675)年に61歳で隠居したのちは、源氏物語の注釈書である『窺源抄』を著している。彼は、幅広い学問的な知識を持つ人物であったといえよう。

『所歴日記』は、彼が49歳の時に有馬へ湯治に行った際の記録である。全5巻から成り、出版はされていないものの写本で多く伝わったとされている²³⁾。3月3日に江戸を出立し、東海道を通過して15日に伊勢神宮へ参拝、24日に京都へ到着した。それから4月28日まで滞在し、さまざまな名所をめぐっている。そののち、彼は大和・河内を経て5月11日に有馬へ到着する。20日に有馬を発った彼

は、明石へと足を延ばしたのち、美濃路から東海道を通って閏5月8日に帰着した²⁴⁾。

滝²⁵⁾によると、『所歴日記』の特徴は以下の4つにまとめられる。(1)歌枕に特に留意しながら和歌・俳句を詠み、(2)神社・仏閣・旧蹟を訪ねては丹念に縁起・伝承を記し、(3)滞京中には連歌の興行にも積極的に参加し、(4)そのため往路は東海道を途中から姫街道をとって浜名湖を鑑賞し、伊勢神宮に参詣して伊勢派と交友、大和・河内を経て有馬へ出ている。このうち、京都における名所めぐりと関連するのは(1)と(2)である。常軒の関心を明らかにするため、これらに着目して各名所における記述を検討したい。

研究方法は以下のとおりである。まず京都における常軒の名所めぐりを復原する。次に、名所に関する記述を、①本尊・開基・所在地などの基本的な情報、②歌・俳句に関するもの、③伝承記事、④現地の経験、⑤その他の5つに分類する。さらに、②歌・俳句に関する記述に引用される古歌に着目し、常軒

が何を参考にして名所めぐりを行っていたのかについても検討を加える。その比較対象として、当時刊行されていた案内記である『京童』と『洛陽名所集』(ともに1658年)の2つをとりあげる。『京童』は全6巻で構成されており、名所の故事来歴や、まれに創設に関わる人物の伝が記されている。作者の中川喜雲は、医学を学ぶ傍ら松永貞徳らに俳諧を学んだ人物であり、自己の発句を載せるのも『京童』の執筆動機のひとつであったといわれている²⁶⁾。一方、『洛陽名所集』は全12巻から構成され、名所・旧跡の場所、本尊、由来、創設に関わる人物の伝が記され、古歌が引用されている。作者の山本泰順は、漢学・和歌を学んでおり、京都の名所・旧跡を訪ねた経験をもとにこれを作成したという²⁷⁾。

Ⅲ. 京都における石出常軒の名所めぐり

(1) 滞在中の行程について

常軒の京都における行程を表1・図1に示した。3月24日の夕刻に京都へ到着した常軒

表1 京都における石出常軒による名所めぐりの行程

月日	行程
3月26日	建仁寺→六波羅蜜寺→大仏→三十三間堂→豊国神社→烏辺野*→清水寺→法観寺→雲居寺跡→祇園社→知恩院
3月27日	神泉苑→木嶋明神→広隆寺→清凉寺→大覚寺→亀山*→二尊院→天龍寺→芹川*→臨川寺→法輪寺→戸難瀬の滝→千鳥ヶ淵→嵐山*→松尾大社→(野宮神社)→西芳寺→梅津川*→梅宮大社→壬生寺
3月28日	往生院→三宝寺→愛宕山→月輪寺→広沢の池→常盤の里*
3月29日	下御霊神社→矢田の地蔵
4月2日	悲田院→南禅寺→永観堂
4月7日	若王寺→銀閣寺→黒谷→神楽岡*→吉田神社→干菜寺→知恩寺→河合神社→下鴨神社→白河*→真如堂→立本寺→降国寺**→浄花院→東北院→草堂→中御霊神社
4月8日	相国寺→妙顕寺→妙覚寺→大徳寺→雲林院→今宮神社→船岡山→蓮台寺→千本間魔堂→鹿苑寺→平野神社→紙屋川*→北野天満宮→内野*
4月11日	補陀落寺→鞍馬寺→貴船→上賀茂神社→齋院→上賀茂神社→瀬見の小川
4月13日	今熊野神社→清閑寺→泉涌寺→東福寺→金光寺→西本願寺
4月14日	妙心寺→仁和寺→河原院→双ヶ丘→鳴滝*→神護寺→西明寺→高山寺→蓮華峰寺→等持院→龍安寺
4月15日	修学寺→八瀬→八瀬天満宮→惟喬親王御室跡**→小野*→大原寺→呂律の滝→音無の滝→臘清水→寂光院→松ヶ崎
4月16日	六角堂→本圀寺→大通寺→東寺→四ツ塚→羅城門跡→西寺→梅津川*→向日明神→真経寺→奥法寺→光明寺→善峯寺→三站寺→(冨野の沼)→衣手の森
4月21日	伏見稲荷→藤森神社→霞谷→木幡川*→弥陀次郎旧跡**→宇治橋→槇島→橋姫神社→平等院→離宮八幡宮→興聖寺→岩谷薬師→万福寺
4月27日	元慶寺→醍醐寺→一言寺
4月28日	因幡堂→新玉津島神社→大原野神社→勝持寺
5月23日	美豆*→石清水八幡宮→羽東師社→鳥羽*→秋の山*→恋塚

注) *は山、川、里など図1にポイントで示すのが困難な場所、**は場所の特定が困難であり、図1に示していないものを指す。また、野宮神社・泉涌寺は記載順のとおり示しているが、実際の訪問順序は異なると思われる。

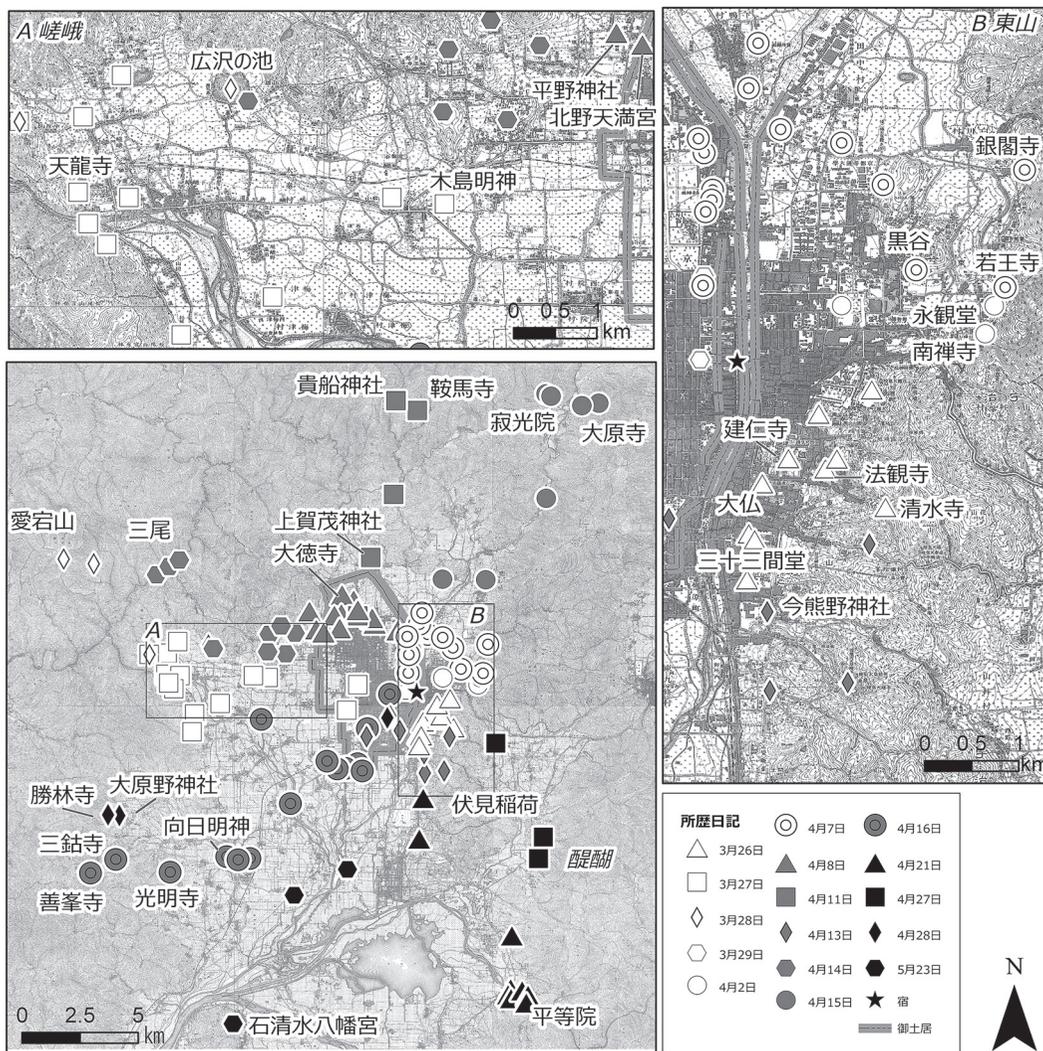


図1 石出常軒が京都において訪れた名所

資料：寛文4年『所歴日記』より作成。以下、図表についても同様である。背景図は「正式2万分の1地形図」(明治42年測図)を利用した。以下、図2・図3についても同様である。

は、三条小橋中島町に仮の宿をとった。そして、翌日樵町に宿を変え、26日から見物を始めている。冒頭には「いとはやく都めぐりの見まほしき心にいさなはれて、先なきあたりをとて、東山におもひ立」²⁸⁾とあり、大仏、三十三間堂や清水寺など、おもに東山の南部から見物を始めた。見物の2日目である27日には嵯峨を訪れ、28日に愛宕山に登り、29日はその疲労からか、近くの寺をめぐるにとど

めている。

彼は4月2日に南禅寺や永観堂といった東山の北部を訪れたが、途中で雷雨に遭い名所めぐりを諦めた。その雨は6日まで続き、雨上がりの7日に銀閣寺や黒谷といった2日の続きとみられる行程をめくっている。8日には、大徳寺や北野天満宮など市街地の北西部、11日には鞍馬寺・貴船神社といった遠方の名所へと足を伸ばしている。13日に、東山

のなかで行きそびれていた今熊野神社を訪れた彼は、14日には宿から西に離れた三尾（神護寺・西明寺・高山寺）を訪ね、15日は大原寺や寂光院といった大原の名所、16日には向日明神や光明寺など大原野にある名所を訪れている。これらは、宿のある三条大橋周辺からは遠方の名所といえよう。

17日から20日は再び雨が続き、天候が回復した21日、彼は伏見稲荷を経て平等院をはじめとした宇治の名所をめぐる。22・23日は近江へ足を延ばしている。そのうち、24日は雨で外出せず、25日は雑事をこなし、26日は連歌会に出席した。そして彼は、27日に醍醐をめぐる、28日に再び大原野を訪れた。このうち、彼は5月1日には京都を発し奈良へと向かう。そして12日から19日まで有馬温泉に

滞在し、その復路に再び京都へと立ち寄り、その際には石清水八幡宮を訪れている。

(2) 名所に関する記述の分析

常軒の記した名所に関する記述を、表2のように分類した。また表3には、それぞれの記述例を示した。

①の基本情報については、記述は簡単なものが多い。例示した建仁寺や千本焔魔堂でも、開基者や本尊について記されているのみである。このような記述は15ヶ所で確認できる。また、基本情報のほかに現地の経験が記された名所は3ヶ所みられた。

②の歌・俳句に関する記述の量は名所によって差があり、後述するが、古歌を引用したり自ら詠んだ歌・俳句を記したりいくつか

表2 『所歴日記』にみる名所に関する記述の分類

分類項目	名所						
①基本情報	建仁寺 今熊野神社 離宮八幡宮	三十三間堂 清閑寺 西芳寺④	知恩院 泉涌寺 鹿苑寺④	南禅寺 龍安寺 万福寺④	黒谷 修学寺	真如堂 四ツ塚	千本焔魔堂 向日明神
②歌・俳句	六波羅蜜寺 戸難瀬の滝 梅宮大社 瀬見の小川 等持院 松ヶ崎 雲林院 岩谷薬師 河合神社 天龍寺③ 神護寺③	豊国神社 芹川 月輪寺 斎院 八瀬 梅津川 今宮神社 元慶寺 下鴨神社 千鳥ヶ淵③ 善峯寺③	鳥辺野 法輪寺 広沢の池 東福寺 小野 冴野の沼 船岡山 白河 愛宕山③ 伏見稲荷③	雲居寺跡 嵐山 常盤の里 金光寺 勝林院 衣手の森 平野神社 美豆 木幡川 東北院③ 榎島③	祇園社 松尾大社 永観堂 河原院 呂律の滝 藤森神社 紙屋川 羽束師社 清水寺③ 北野天満宮③ 大原野神社③	大覚寺 野宮神社 神楽岡 双ヶ丘 音無の滝 橋姫神社 内野 鳥羽 木嶋明神③ 鞍馬寺③ 勝持寺③	二尊院 梅津川 霞谷 鳴滝 臈清水 宇治橋 貴船 秋の山 亀山③ 上賀茂神社③ 石清水八幡宮③
③伝承記事	大仏 革堂 真経寺 清水寺② 北野天満宮② 大原野神社②	法観寺 仁和寺 光明寺 木嶋明神② 鞍馬寺② 勝持寺②	神泉苑 蓮華峰寺 弥陀次郎旧跡 亀山② 上賀茂神社② 石清水八幡宮②	広隆寺 八瀬天満宮 平等院 天龍寺② 神護寺② 干菜寺④	清涼寺 寂光院 醍醐寺 千鳥ヶ淵② 善峯寺②	悲田院 六角堂 因幡堂 愛宕山② 伏見稲荷②	吉田神社 羅城門跡 新玉津島神社 東北院② 榎島②
④現地の経験	若王寺 西芳寺①	銀閣寺 鹿苑寺①	補陀落寺 万福寺①	大通寺 干菜寺③	東寺	三鈷寺	興聖寺
⑤その他	往生院	三宝寺	大徳寺				

注) 丸番号はその項目が併記されていることを示す。臨川寺、壬生寺、下御霊神社、矢田寺、知恩寺、立本寺、隆国寺、浄花院、中御霊神社、相国寺、妙顕寺、妙覚寺、蓮台寺、西本願寺、妙心寺、西明寺、高山寺、惟喬親王御室跡、本圀寺、西寺、奥法寺、恋塚は名所を訪れたことがわかるのみで、その場所にまつわる記述はみられなかったため、表中に記載していない。

表3 各分類における記述例

分類項目	名所	記述例
①基本情報	建仁寺	建仁寺にいたる。此寺は土御門の御宇、建仁二年に建立ありて、則寺号とせり。榮西和尚の開基也。木立物ふりて寺のさまいとよし。
	千本焰魔堂	此寺は小野篁建立の地也、則篁の作りし焰魔像あり。
②歌・俳句	平野神社	此社は桓武の御宇、延暦年中に造立あり。四社双て立給ふ。今木・久度・古開・比売神是也。第一の御殿は源氏、第二は平氏、第三は高階氏、第四は大江氏、都て八姓の祖神にてまします。松杉多く立双てむかしわすれぬみとりをめて、(生しけれ平野の松もあや杉も千世には千世の色をかさねて)
③伝承記事	法観寺	爰を八坂と云は八方にある地なれば也、聖徳太子の開基、天曆年中に此塔傾て王城にむかふ、其方凶有とて、官人集りて憂とす、時に三善清行第八の子浄蔵貴所、是を祈るにあやしき風吹来りて、塔たちまちすなをになりぬといひ伝へ侍りき。
②と③の併記	天龍寺	此寺は嵯峨天皇の后橘嘉知子唐に仏心宗ありと聞て慧萼に詔して、唐につかはし、その法を求給ふ、萼、杭州の靈池院にいたりて、齋安禪師にあひて皇后のをくり物を捧て、安師、皇后の志をかんにして、義空を日本に渡す。空、萼と伴ひて本朝に来る。皇后檀林寺をたて、空をいつきて、時、法を聞給ふ、しか有により、檀林皇后とそ申ける。其跡今の天竜寺なり。其後あればつるを疎石のすゝめによりて源尊氏再興して疎石を開山とす。夢想国師是也。花はなけき色もなしとおしみ給ひし桜は、此寺にや有つらんと、むかしおもはれて、いともしろし。
④現地の経験	若王寺	若王寺に行て見れば、寺のさまよしありて、庭に白砂まきて、めにたゝぬちりもなく、東の方に松山あり。をのつから築山と見なして、遣水いさ清くなかし、杜若・さうぼうへませて、夏をこのめると見えたり。卯花垣の盛なるを見ては、冬こもりすへき住居になん侍りけるぞ。

注) 〈 〉は詠まれた歌を示す。

のパターンがみられる。また、木嶋明神のように伝承記事とともに記されることもある。このような伝承記事とともに記されたものも合わせると、歌・俳句に関する記述がみられるのは76ヶ所にも及ぶ。

③の伝承記事は、名所に関する由来、謂れや伝説などについての記述である。例えば法観寺では、いわゆる八坂の塔が傾いた際、浄蔵貴所が祈ることでそれをもとに戻したという伝説が記されている。また干菜寺では、寺の由来を記したのちに常軒自身が目にした寺の様子が書かれている。このような記述は、21ヶ所でみられる。歌・俳句や現地の経験に関する記述が合わせてみられるものを含めると、38ヶ所になる。

④の現地の経験は、名所で常軒が目にした事柄が記されている。常軒は、若王寺において自らが見た白砂や杜若・菖蒲など庭の様子

を記述している。このような記述は7ヶ所で確認でき、基本情報や伝承記事も記されているものと合わせると11ヶ所となる。

全体的にみると、滝²⁹⁾や板坂³⁰⁾が指摘したように②歌・俳句に関する記述が最も多く、③伝承記事がそれに続いている。このうち、②歌・俳句に関する記述のある名所をさらに詳しくみると、76ヶ所のうち31ヶ所が社寺、45ヶ所が川・滝・山などの自然物や、里の地名であった。また、③伝承記事の記された名所をみると、38ヶ所のうち35ヶ所が社寺、3ヶ所が旧跡であった。ここから、歌・俳句に関する記述は社寺以外でやや多く、伝承記事は社寺に関するものが多いとわかる。

表3の記述例をみると、例えば平野神社では、境内に松と杉が多いさまを見て歌を詠んだことが記されている。また、法観寺や天龍寺では、その場所についての伝承記事が記さ

れている。常軒がどのようにこの伝承を入手したのかは記されていない。しかし、法観寺で「いひ伝へ侍りき」という記述があるように、名所に関する由来や伝承を収集して記すという行動がみてとれる。

また、天龍寺では、「花はなげき色もなしとおしみ給ひし桜は」³¹⁾という記述がみられる。これは、夢窓疎石の〈ちればとて花はなげきの色もなし我がためにうき春の山風〉を指しており、夢窓疎石の詠んだ桜はこの寺にあったのだろうという常軒の見解が記されている。

『所歴日記』では、このような②歌・俳句に関する記述が最も多く、さらに以下の3つに分類できる。(1) 歌枕を訪ね、古歌に詠まれた景色を見て自らも歌を詠む。(2) 古歌に触れるのみで、歌は詠まない。(3) 古歌に触れずに歌を詠む。

このうち、(1) の例として、4月14日の神護寺(高雄)では、「九折をのほり山に至りて西をのそめは、清滝川を底に見て、とよみしにたかわす筏の下るを見て、〈筏士の竿にかけてや乱すらん清滝川の瀬の白糸〉」³²⁾とある。山上で、権大納言冬基の詠んだ〈高雄山清滝川を底にみて谷かけめくる松のしたみち〉という歌と同様に、眼下の清滝川を筏が下っていくのが見え、それについての歌を自らも詠んでいるのである。

(2) については、3月26日に鳥辺野に関して「成範か独や苔の下にとよみて母の別をかなしみ、俊成卿はなくなるとなかめて道芝の露を分し、むかしの事迄おもひ出られていと哀なり」³³⁾と記している。ここで常軒は、民部卿成範が母の死を悲しんで詠んだ〈鳥へ山思やるこそかなしけれ独や莓のしたに朽なん〉、藤原俊成の〈分きつる袖の雫か鳥へのなくなくかへる道しはの露〉の2首の歌を思い、「あはれ」に感じたとしている。

また、(3) に関しては、4月11日に鞍馬山

で「かくて僧正谷にゆく。その道木茂く立双て日の影も見えず。物すこければ、〈夏木立しけみかおくに分入はいとくらのまの山そさひしき〉」³⁴⁾と、鞍馬山の木々が鬱蒼と茂っている様子を歌に詠んでいる。

以上のような記述は、ほとんどすべての日程で見られる。3月29日、4月2日、13日、28日は比較的少ないが、3月29日は前日の愛宕山登山の疲労が残っており、近場のみをめぐったためだと考えられる。また、4月2日と13日は、雨が降ってきたことで予定の行程を消化できなかったため、4月28日は大原野神社を訪れるために以前訪れた大原野を再訪したからであろう。反対に、3月27日は歌の記述が多くみられる。これは、歌枕の地が集中している嵯峨で、多くを訪ねることができたからである。

以上のように、常軒は歌枕の地を訪れたりそこで歌を詠むことに対して非常に強い関心を持っていた。また、歌を詠まない・古歌に関連しない名所(社寺)においては、伝承記事を積極的に収集していたといえよう。

IV. 常軒の行動にみる歌枕への関心

(1) 歌枕をめぐる際の特徴的な行動

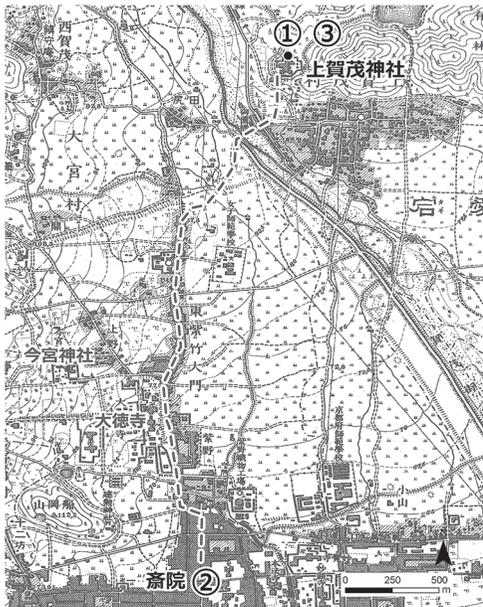
歌への関心が強い常軒は、いくつか特徴的な行動をとっている。まずは、4月10日に鞍馬寺・貴船神社を訪れたあとである。

それより川にそひて南にゆき上加茂に至る。此御神は別雷の神也。(略)嵯峨天皇の御時より伊勢になそらへて、齋院を立給ふ、それを有栖川の御所と云。加茂の西に旧跡有を尋て、〈そのかみはいつきの宮の有栖川あくとも見えす神さひにけり〉御社に帰いりて、〈たのもしな加茂の社の神垣に心の注連をかけたきつれば〉³⁵⁾

貴船神社を出た彼は、貴船川と賀茂川に沿っ

て南へ行き、上賀茂神社を訪ねた(図2)³⁶⁾。ここでは、上賀茂神社の由来について記しており、そのなかで嵯峨天皇によって賀茂社に置かれた「有栖川の御所」(斎院)に触れている。そして、上賀茂神社の西にあるという有栖川の御所の旧跡を訪れるのである。そこでは、斎院が今でも神々しいと歌を詠み、それから再び上賀茂神社へ戻り、斎院を訪れたうえで上賀茂神社を再訪する心境を歌にしている。

斎院とは、天皇が即位した際に未婚の内親王か女王から選ばれた「阿礼乎止女」が祭儀や賀茂祭に奉仕する場所である。大斎院と称された選子内親王などにより女流文学サロンが形成され、平安時代後期にはしばしば歌合が行われたことでも知られている³⁷⁾。歌枕の



- ①それより川にそひて南にゆき上加茂に至る。
- ②加茂の西に旧跡有を尋て、
〈そのかみは いつきの宮の 有栖川
あくとも見えす 神さひにけり〉
- ③御社に帰りて、〈たのもしな 加茂の社の神垣に
心の注連を かけてきつれば〉

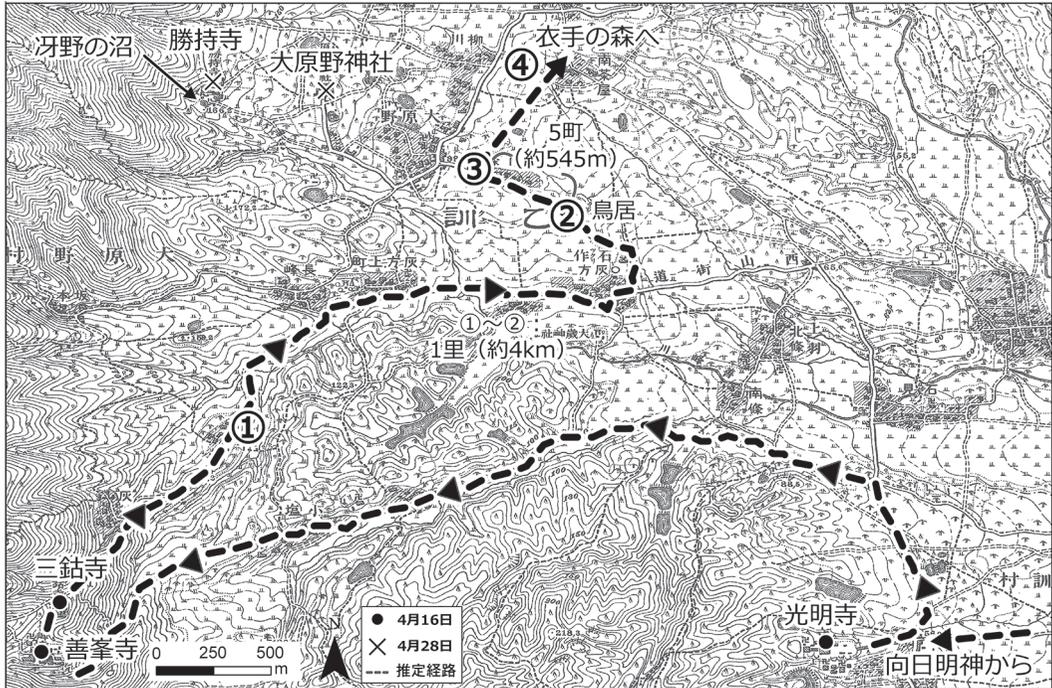
図2 『所歴日記』にみる上賀茂神社・斎院への訪問
注) ここでは、上賀茂神社から斎院への想定される経路を示した。

地でもあり、上賀茂神社と関係の深い場所でもあることから、常軒は両者を往復したものと考えられる。彼の歌枕を訪れることへのこだわりが垣間見える行動といえよう。

さらに常軒は、4月16日に善峯寺を訪れるため、「明方に舍りを出て」³⁸⁾六角堂、東本願寺、東寺などをめぐりながら、洛外の南西にある向日・大原野を目指した(図3)。向日明神や光明寺などをめぐって善峯寺を訪れた彼は、北の三鈷寺を経て大原野神社を目指した。しかし、大原野神社と書かれた鳥居をめぐり5町(約545m)ほど行っても社は見つからない。人に訊ねたところ、社までは20町(約2.1km)ほどもあるといわれ、同行した友人に日が傾いてきたために訪問を断念するよう説得される。「いと口おし」³⁹⁾と記している彼は、帰路に歌枕の「冴野の沼」を探した。

冴まさるらんとよみし冴野の沼ハ此野に有へしと帰り来る道すから心を付て見侍りをれハ、いとひろき沼あり。是にやとおもへと、知る人あらねハさためかたき。折しも薪をおへる山人の杖にすかりてたとり来れり。とへハこれなん冴野ノ沼也と云を聞て、(小塩山 あらしはけしき ところハ 冴野の沼と いふへかりけれ)⁴⁰⁾

ここで常軒は、現地の人に訊くことで「冴野の沼」の場所を比定しようと試みている。ただし、彼が比定した沼が本当に冴野の沼であったかについては疑問が残る。現在、冴野の沼は勝持寺の境内にあるとされている⁴¹⁾。しかし、三鈷寺からのちの行程を復原した図3をみると、彼が鳥居から5町進んだところで帰路についたのであれば、勝持寺にある冴野の沼を通っているのは不自然である。さらに、彼は28日に勝持寺を訪れているが、冴野の沼については何も触れていない。この時期に刊行されていた案内記『洛陽名所集』をみ



- ①いと高き山より東にくたりゆけハ、背中に石の鳥居遙にミゆ。
道しれる人もなけれハ、それをしるへに一里計行て・・・
- ②鳥い本にいたりて見れハ、大原野春日大明神と鳥居にほり付て有。
さ侍りと嬉しくて鳥居の奥へ五町はかり入て見れハ社の有へき木立もなく、
唯広き野なり。
- ③たゝ帰り給へとしひて侘けれハ、又こそとちきりて帰る。いと口おし。
- ④沼野の沼ハ此野に有へしと、帰り来る道すから心を付て見侍りをれハ、
いとひろき沼あり。

図3 『所歴日記』にみる大原野への訪問

注) 『所歴日記』より筆者作成

ると、沼の場所については「此所ハ小塩山のすそ也」⁴²⁾とあるのみである。「沼野の沼は勝持寺にある」という認識がいつから人々の間に定着したのかは明確にできない。しかし、常軒が京都を訪れた時期には、場所の認識が未だ定まっていなかったのではないかと推察される。そのようななかで、彼は歌枕の地をめぐることを重要視していたのである。

28日、常軒は「明日に八大和に行んと急てさため侍りけれハ、けふなして外ありきすへき日なし。過にし十六日に大原明神にまうですして帰りし事口おしくおもひて雨をもよほ

す空の気色なれ共おもひ立て」⁴³⁾、16日に訪問を断念した大原野神社へ訪れようと試みている。以前に周辺の名所はめぐり終えているため、この日は洛中の因幡堂・新玉津島・五条天神をめぐったのち、大原野神社へ向かっている。

二條后行啓ありし時、業平朝臣、大原や小塩の山もけふこそハとよみて奉りしは此所にての事也。宮の後に有を小塩山と云。はや木かゝれと貫之かいさめし松に梢ひとしく生のほりて雲にあらそふ。枝

うつりして時鳥の鳴を聞て、〈なれさへも 神代の事を おもひてゝ 鳴や小塩乃 山時鳥〉と打詠て西行法師の籠りし小塩山勝持寺に至る⁴⁴⁾。

在原業平が詠んだ歌は、二条后がここを訪れた際にこの場所で詠んだものと記している。さらに、紀貫之の歌と同様に、伸びる松の枝を飛び移りながら鳴く時鳥の声を聞いて歌を詠んでいる。前回訪問を断念した大原野神社は、歌枕の地である小塩山の麓にあり、常軒は業平の歌に詠まれた情景を自らも見て歌を詠むため、この場所を訪れることを強く望んでいたであろう。

(2) 常軒が参考とした資料の検討

では、常軒は歌枕の地をめぐる際に何を参考にしていただろうか。まず考えられるのが、当時刊行されていた案内記の『京童』⁴⁵⁾と『洛陽名所集』⁴⁶⁾である。そこで本稿では、古歌の記述に着目したうえでこの2つの案内記と『所歴日記』との比較を試みた。

まず、『京童』に記載された88ヶ所の名所のうち、常軒は36ヶ所(約4割)を訪れている。しかし、常軒の引用した古歌が『京童』と一致したのは、今宮神社と貴船の2ヶ所のみであった。また『京童』には、常軒の訪れた場所が項目として立てられていないことも多い。彼の行動と比較しても、それが『京童』と影響関係にあったとは言い難い。

同時期に刊行された『洛陽名所集』には261ヶ所の名所が記載されており、常軒はそのうち57ヶ所(約2割)しか訪ねていない。ここからも『洛陽名所集』が常軒の行動に影響を及ぼしている可能性は低いと推察される。古歌の記述に着目すると、『洛陽名所集』は『京童』よりも多くの古歌を記しており、『所歴日記』に引用された古歌と一致するものとしなないものが混在している。そこで、表4に常軒が歌について記した名所の内訳と、そ

表4 記述内容に基づく訪問箇所分類と『洛陽名所集』との関係

訪問した名所	141
古歌に触れた名所	42
『洛陽名所集』に同様の古歌の引用あり	12
うち自らも歌を詠んだ名所	10
うち古歌の引用のみがみられた名所	2

資料：寛文4年『所歴日記』、万治元年『洛陽名所集』より作成。

れがどの程度『洛陽名所集』と一致するかを示した。とくに、両者が引用した古歌について着目してみると、常軒が古歌に触れた42ヶ所のうち、『洛陽名所集』に同様の古歌の収載がみられたのは12ヶ所であった。『京童』と比べると重複が多いものの、一致したのは3割未満である。つまり、歌という視点でみた場合、常軒が歌枕の地をめぐる際に参考としていたのは『京童』・『洛陽名所集』であったとは考えにくい。

では、常軒の歌枕をめぐる行動に影響を及ぼしているのは何なのだろうか。日記の記述内容を精査すると、彼は京都で幾度か知人と会ったことを記している。まずは、京都へ到着した翌日である3月25日の記述をみてみたい。ここには、「法橋昌程に逢て、吉野の花の事を尋侍りければ、我ちるを見て前日かへりつ、はやみなからちりなん、都の遅桜なりともとありければいかすなりぬ、いと口おし」⁴⁷⁾とあり、「法橋昌程」と会い、吉野の桜について話をしたことがわかる。そして、4月1日には「けふは法橋昌程にまねかれ、かのやとりに行く、終日かたり暮して夜になりて帰る」⁴⁸⁾という記述がみられ、彼が「法橋昌程」の家へ招かれ、夜までいろいろと話をしたとある。さらに、4月26日には「祖白⁴⁹⁾発句を所望して昌程宅にて興行す」⁵⁰⁾とあり、「昌程」宅での連歌会に参加したと記されている。

この「昌程」は、里村昌程(1612-1688年)を指している。彼は連歌師であり、寛永13

(1636)年に家督を継いでから法橋として幕府に仕え、延宝元(1673)年まで宗匠をつとめた人物である⁵¹⁾。彼の父である里村昌琢(1574-1636年)は、『類字名所和歌集』(1617年)(以下、『和歌集』とする)を編纂している。これは、南北朝期の『勅撰名所和歌要抄』と『勅撰名所和歌抄出』を典拠としており、『古今集』から『新続古今集』の勅撰二十一代集より名所和歌を選出し類聚されたものである。いろは順に名所が配列されており、歌は概ね勅撰集順に収載されている。また、全国を五畿七道に大別し、国別に名所がわかるようになっている⁵²⁾。

常軒は、この『和歌集』を編纂した昌琢の息子である昌程と交遊があった。歌を詠んでいることからわかるように、常軒は歌人でもあり、歌への素養が高かった。そこで、『所歴日記』と『和歌集』の関係について検討してみたい。

表5は、常軒が歌に触れた記述を分類したものである。古歌に触れた42ヶ所のうち、自らも歌を詠んだ名所は29ヶ所、古歌の引用のみをした名所は13ヶ所である。そのうち、『和歌集』に同じ古歌が収載されていたのは、それぞれ25ヶ所、5ヶ所であった。両者を合計すると、30ヶ所(約7割)が『和歌集』にも収載されていたことになる。また、古歌に触れずに歌を詠んだ名所は34ヶ所あった

表5 記述内容に基づく訪問箇所のカテゴリと『類字名所和歌集』との関係

訪問した名所	141
古歌に触れた名所	42
自らも歌を詠んだ名所	29
うち『類字名所和歌集』に収載	25
古歌の引用のみ	13
うち『類字名所和歌集』に収載	5
古歌に触れずに歌を詠んだ名所	34
うち歌枕として『類字名所和歌集』に項目有	28

資料：寛文4年『所歴日記』、元和3年『類字名所和歌集』より作成。

が、うち28ヶ所は歌枕として『和歌集』に収載されている。このなかには、古歌の引用はないものの、その場所が歌枕であると意識して詠まれたものがいくつかみられる。

そのような名所を表6に示した。例えば広沢の池において、常軒はこの場所が月の名所であると記し、月の歌を詠んでいる。一方、『和歌集』をみると、「廣沢」の項に収載された7首の古歌のうち、月の詠みこまれたものが3首ある。また、常軒は平野神社において立ち並ぶ松と杉を目にし、それらを詠みこんだ歌を記している。『和歌集』の「平野」の項には4首の歌が収載されているが、常軒は清原元輔の〈おひ茂れ 平野の原の あや杉よこき紫に たちかさぬへく〉という歌をとくに意識して詠んだと推察できる。他にも、上賀茂神社(神山)における「時鳥」、鳴滝の「波」、美豆の「五月雨」や、鳥羽の「早苗」といったように、歌を詠む際にはその土地に特徴的な事物を取り合わせて詠む場合がある。これは、既成の和歌に依拠した一種の本歌取だとされ⁵³⁾、古歌の知識がないとこのような歌を詠むことはできなかったと考えられる。つまり、古歌の引用がされない場合でも、常軒はこれらの名所を歌枕と認識し、そこを訪れて歌を詠んでいたといえる。

このように、歌枕の地を訪れて歌を詠むことに重点を置いていた常軒は、その際に『和歌集』を参考にしていった可能性が極めて高い。帰国して約10年後、彼は自らも『机右鈔』(1677年)という和歌集を作成している。これは、『和歌集』と同様にいろは順・国別に歌枕が収載されるという体裁をとっており、後書きには以下のように作成の経緯が記されている。

勅撰名所集ハ歌の数すくなくして事たらず、類字名所集ハ名所乃数多くしてみる人いたつらに眼をついやしその要をしらす。この二乃集におみてたらざるをおき

表6 古歌との関連が推察される記述と『類字名所和歌集』に収載された古歌

名所	歌枕	常軒の詠んだ歌	『類字名所和歌集』に収載された古歌
広沢の池	廣澤	秋は都人爰に來りて見はやす月の名所なれば、春なれとも月の比ならば、此池辺に夜をあかすへき物をとおもひて、〈おほろけに あらしとおもへは 見ぬ月の 梯うかふ 広沢の池〉	藤原範永〈住人も なき山里の 秋のよは 月の光も さひしかりけり〉 藤原範永〈山のはに かくれなはてそ 秋の月 此世をたにも 闇にまとはし〉 頼政〈古の 人は汀に かけたえて 月のみすめる ひろさはの池〉
平野神社	平野	松杉多く立双てむかしわすれぬみとりをめて、〈生しけれ 平野の松も あや杉も 千世には千世の 色をかさねて〉	清原元輔〈おひ茂れ 平野の原の あや杉よ こき紫に たちかさぬへく〉
齋院	齋院	加茂の西に旧跡有を尋て、〈そのかみは いつきの宮の有 栖川 あくとも見えす 神さひにけり〉	実方〈千早振 いつきの宮の ありす川 松とともにそ 影は澄へき〉
下鴨神社	瀬見小川	〔略〕社のわきをなかるゝを瀬見の小川となむいひける。その流にのそみて、〈神こゝろ 常につむらし 石川や 瀬見の小川の 清き流に〉	鴨長明〈石河や せみのを川の きよければ 月も流を 尋てそすむ〉
上賀茂神社	神山	時鳥のやとるへき便有、梢をなかめて、〈ゆふかけて 声を手向よ 千早振 そのかみ山の 山ほとゝきす〉	皇后宮美作〈きかはやな その神山の 郭公 ありしむかしの おなし聲かど〉 式子内親王〈郭公 そのかみ山の たひ枕 ほのかたらひし 空そわすれぬ〉 後鳥羽院〈神山に ゆふかけてなく 子規 椎柴かくれしはしかたらへ〉 為家〈郭公 をのかふる聲 たちかへり そのかみ山に 今なのるらし〉 賀茂遠久〈としをへて わか神山の 子規 おなし初音を 今もきくかな〉 二条院〈時鳥 其神山の そのかみも かはかり待し 人はありきや〉 等持院贈左大臣〈神山の もりの下草 ふみならし まつ日かさなる 時鳥かな〉 無品親王〈さかき取 卯月きぬらし 時鳥 その神山に ゆふかけてなく〉
鳴滝	鳴滝	鳴滝にいたりて、〈いさきよく なるゝ水の 水上に 行行近く 鳴滝の波〉	皇太后宮大夫俊成〈鳴滝や 西の川せに みそきせん 岩こす波も 秋やちかきと〉
美豆	美豆	五月雨の降■へき明方の空ほのくらきに此里にきて〈五月雨の 空にかくるゝ 美豆の森 みす八あらしと 尋きにけり〉	相模〈五月雨は みつのみ牧の ま蔭草 かりほす隙も あらしとそ思〉 藤原清助朝臣〈時しもあれ みつのみこもを 刈上て ほさてくたしつ 五月雨は〉 後八条前内大臣〈波こゆる みつの上野の 五月雨になひく水草 やしのゝを薄〉
鳥羽	鳥羽	鳥羽に來りておりたつ田子の早苗とるを見て〈足たゆくなりや しぬらん里人の 鳥羽田の早苗 とる手いとなき〉	津守国夏〈時きぬと なく郭公 うち羽吹 鳥羽田の早苗 今やとるらん〉 後京極摂政前太政大臣〈白雨の なこりの雲を 吹風に とは田の早苗 未さはくなり〉

資料：『所歴日記』『類字名所和歌集』より作成。

注) 太字は、古歌に詠みこまれているその土地の事物を示した。

なひ、あまり有をけつりて、只よの常人のいひならはせり名所の遠からぬをあつめて四百にあまれり⁵⁴⁾

ここには、「勅撰名所集は歌の数が少なく、類字名所集は名所の数が多いので見る者の目を煩わせる。そこで、この2つの和歌集

に足りないものを補い、余分なものを削り、一般的な名所を集めて400あまりになった」と記されている。このことから、常軒が『和歌集』を参照しており、自身の旅の経験をもとにして自ら和歌集を編纂したことはほぼ間違いないであろう。

V. 近世初期の知識人による名所めぐり

上杉⁵⁵⁾は、近世の名所を、歌枕に由来する〈歌名所〉とそれ以外の〈俗名所〉、中世以前に発生した〈過去名所〉と同時代に発生した〈現在名所〉に分類した。常軒のめぐったのはすべて〈過去名所〉であり、〈歌名所〉をめぐるながら、〈俗名所〉で伝承記事を収集していたといえよう。

このような傾向は、『所歴日記』の約20年後に書かれた『千種日記』(1683年)にもみられる。作者の姓名は不明だが、尾張藩士だとされている⁵⁶⁾。山崎闇斎のもとで儒学を学んでおり、日記中に古歌に関する記述があることから、常軒と同時代の知識人といえる。この作者は、近世初期の限られた史料のなかで、常軒と類似した属性を持っているため、この日記を近世初期の名所めぐりの事例として検討したい。例えば、常軒が歌についての記述を残している平野神社において、作者はこの場所が仁徳天皇陵だという説に基づき、藤原家隆が詠んだ歌を記している。また、『日本書紀』の記述に触れ、この説が真実であるか訝しく思う考えが述べられている。ここでは、家隆の古歌を記すだけでなく、収集した伝承記事の真偽を『日本書紀』の記述を引いて検証しているのである⁵⁷⁾。

また、〈歌名所〉をめぐる際に、常軒と同じように『千種日記』の作者もその場所にまつわる古歌について、強く意識している。上賀茂神社を訪れる前には、道沿いから少し離れた齋院へ立ち寄っており、齋院にまつわる由緒とこの場所について詠んだ歌を2首記している⁵⁸⁾。彼も、常軒と同様に上賀茂神社と齋院の結びつきを認識していることがわかる。

ここから、古歌に関心を持って歌枕の地をめぐり、伝承記事を収集するのは、近世初期の知識人にとってある程度共通する特徴ではないかといえる。この時期は、水江⁵⁹⁾が述べるように、名所が「歌を詠むため、心に思

うだけの名所から、そこへたどりつき、見たのしむための名所」へと変化した。中世以前、名所といえば〈歌名所〉のみであったのが、〈俗名所〉も名所と呼ばれるようになり、交通事情や社会背景など旅に出られる条件が整ったことで、人々はさまざまな名所を訪れることができるようになったのである。ただし、この時期に〈歌名所〉の正確な位置は未だ定まっていなかった。そのようななかで、常軒ら旅人は古歌に思いを馳せながら歌枕の地をめぐることを重要視していた。名所の情報を得る媒体が少ないなかで、近世初期の知識人たちがこのような行動をとっていたことは、京都における名所めぐりの初期の形をみるうえで重要といえる。

近世中期以降になると、案内記が出版され、旅人はそれらから名所の情報を得ることができるようになった。近世初期には曖昧であった歌枕の場所も、案内記が出版されることで訪ねることが容易となったと推察される。この時期の知識人も、歌枕の地をめぐることに関心をもち⁶⁰⁾、積極的に京都の名所をめぐっていた。『所歴日記』は出版されていないものの、写本で多く出回ったとされているため、後世の旅人に参考にされたことがあったかもしれない⁶¹⁾。

VI. おわりに

本研究では、石出常軒が自らの旅について記した『所歴日記』を対象に、近世初期の知識人による名所めぐりを復原し、彼の名所選択とそこでの行動を明らかにした。

名所に関する記述は、歌・俳句についてのものが非常に多くあり、次いで伝承記事を記していた。歌・俳句についての記述は社寺よりも滝や山などの自然物がやや多く、伝承記事は社寺に関するものがほとんどであった。歌・俳句に関する記述はほぼ全日程でみられることから、常軒は歌枕への訪問とくに強い関心を持っていたと考えられる。これは、

上賀茂神社・齋院間の結びつきを意識していることや、大原野への再訪に表れている。常軒の行動の中心は歌枕の地を訪ねることであり、歌枕ではない社寺・旧跡においてはその場所の由緒や伝承を収集していたのである⁶²⁾。このような傾向は、『所歴日記』より約20年のちの『千種日記』にもみられる。『千種日記』の作者も儒学者であり、常軒と同じく歌への素養を持つ知識人だといえる。彼も、常軒のように歌枕を意識しており、一方で社寺においては伝承記事を記す行動をとっていた。

常軒の関心がとくに強い歌・俳句についてみると、歌枕をめぐる際に参考にしたのは当時刊行されていた案内記ではなく、知識人の交遊のなかで得られたと考えられる里村昌琢の『類字名所和歌集』であった。常軒が帰国したのちに自ら和歌集を編纂したことから、この『和歌集』が彼に与えた影響は大きかったといえよう。

常軒の歌を詠む行為は、京都に限ったものではなく、往復路の東海道でも同様の記述がみられた。しかし、『和歌集』に記載されている歌枕の地を訪れて古歌を引用したり、歌を詠んだりするといった行動は京都においてとくに顕著であった。

旅日記には、旅人が訪れた名所の情報がすべて記されないことや、曖昧な情報が記されていることもあり得る。しかし、ガイドブックである案内記とは異なり、旅日記からは旅人の実際の行動や名所への関心を読みとることができるため、書かれている内容を検証したうえで利用することで、当時の旅や名所めぐりの様相を知るのに非常に重要な史料となる。今後は、近世中期以降の京都や、他地域における名所見物についてもみていく必要がある。その際には、旅人の関心、知識や教養などを把握し、それが彼らの行動とどのようにむすびついて反映されるのかを検討したい。

(立命館大学・院生)

本稿は、2017年度人文地理学会大会（明治大学）で発表した内容を修正したものである。

本稿をまとめるにあたり、ご指導いただきました片平博文先生をはじめとする立命館大学地理学教室の先生方に厚く御礼申し上げます。

〔注〕

- 1) 旅の文化研究所編『旅と観光の年表』河出書房新社、2011、34頁。
- 2) 既往研究では、訪れた場所のみを記したような簡素なものを「道中記」、詠まれた歌が記されるなど文学的に評価されるものを「紀行文」と呼称する場合もある。しかし、本研究では、旅の記録を記したものを総じて「旅日記」と称する。
- 3) 小松芳郎「道中記にみる伊勢参詣一近世後期から明治期を通して一」信濃38-10、1986、13-30頁。
- 4) 桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」駒沢史学34、1986、144-181頁。
- 5) 小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷一関東地方からの場合一」人文地理学研究14、1990、231-255頁。
- 6) 田中智彦「愛宕越えと東国の巡礼者一西国巡礼路の復元一」人文地理39-6、1987、66-78頁。田中智彦「大坂廻りと東国の巡礼者一西国巡礼路の復元一」歴史地理学142、1988、1-16頁。
- 7) 岩鼻通明「道中記にみる出羽三山参詣の旅」歴史地理学139、1987、1-14頁。
- 8) ①高橋陽一「多様化する近世の旅一道中記にみる東北人の上方旅行一」歴史97、2001、105-133頁。②高橋陽一『近世旅行史の研究一信仰・観光の旅と旅先地域・温泉』清文堂、2016)、148-182頁。
- 9) 廣瀬優也「旅日記からみた近世の京都参観」愛大史学一日本史・アジア史・地理学一16、2007、29-56頁。
- 10) 前掲8) ②183-213頁。
- 11) 原淳一郎「近世における参詣行動と歴史意識一鎌倉の再発見と懐古主義一」歴史地理学47-3、2005、1-23頁。
- 12) 渡部浩二「江戸時代の旅と越後の名所」歴史地理学55-1、2013、1-16頁。

- 13) 谷崎友紀「旅人の属性にみる名所見物の特徴—武蔵国から京都への旅日記を事例として—」人文地理69-2, 2017, 213-228頁。
- 14) 山近博義「近世名所案内記類の特性に関する覚書—「京都もの」を中心に—」地理学報34, 1999, 95-106頁。
- 15) 塚本はGISを用いて京都の案内記を網羅的に分析し、記載された名所の変遷を明らかにした(塚本章宏「近世京都の名所案内記に描かれた場の空間的分布とその歴史の変遷」, GIS—理論と応用14-2, 2006, 113-124頁)。
- 16) 例えば、菅井は京都の名所案内記に記された経路から、当時の洛中洛外の認識を検討した(菅井聡子「近世京都の名所案内記の順路設定にみる「洛中」「洛外」認識」日本建築学会計画系論文集579, 2004, 163-170頁)。また、長谷川は『都名所図会』の名所の描写方法に着目し、作者・秋里籬島の名所観について言及している(長谷川奨悟『『都名所図会』にみる18世紀京都の名所空間とその表象』人文地理62-4, 2010, 60-77頁。長谷川奨悟「近世上方における名所と風景—秋里籬島編『都名所図会』『撰津名所図会』を中心に—」人文地理64-1, 2012, 19-40頁)。
- 17) 京都の名所案内記類の分類を行った山近によれば、京都の名所案内記のなかで最も古いのは、本稿でも後述する『京童』と『洛陽名所集』(ともに1658年)である(前掲14) 102頁)。
- 18) 上杉和央「17世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」地理学評論77-9, 2004, 589-608頁。
- 19) 前掲13) 216頁。
- 20) 『所歴日記』よりも古いものとして『清水寺花見記』(1637年以前)・『藤波記』(1655年)が挙げられるが、前者は清水寺での花見のみの記述、後者は京都に滞在せず通過した際の見聞に関する記述にとどまっているため、ここでは分析対象としない。
- 22) 水江漣子「近世初期の江戸名所」(西山松之助先生古稀記念会編『江戸の民衆と社会』吉川弘文館, 1985), 5-33頁。
- 22) 滝善成「囚獄の国学者石出常軒の事績について」日本歴史306, 1973, 44-54頁。
- 23) 中村幸彦「近世圏外文学談」(同『中村幸彦著述集13』中央公論社, 1984), 319-322頁。
- 24) 板坂耀子『江戸の紀行文—泰平の世の旅人たち—』中公新書, 2011, 39-73頁。
- 25) 滝善成「所歴日記」(日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』岩波書店, 1984), 435-436頁。
- 26) 市古夏生「山本泰順と中川喜雲—近世文学と地誌—」国語と国文学70-11, 1993, 80-90頁。
- 27) 前掲26)。
- 28) 『所歴日記』(駒敏郎・村井康彦・森谷尅久編『史料京都見聞記1』法蔵館, 1990), 14頁。
- 29) 前掲25)。
- 30) 板坂耀子『『所歴日記』の伝承記事』近世文学44, 1986, 28-40頁。
- 31) 前掲28) 20頁。
- 32) 前掲28) 34頁。
- 33) 前掲28) 15頁。
- 34) 前掲28) 31頁。
- 35) 前掲28) 31-32頁。
- 36) 図2には齋院の正しい位置と、上賀茂神社からその場所への想定される経路を示した。しかし、常軒が齋院の場所を正しく認識していたかは不明であり、訪れた場所は実際の位置とは異なっていた可能性がある。しかし、彼が齋院と上賀茂神社のつながりを強く意識していたことは間違いない。
- 37) 所功「齋院」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館, 1985), 120-122頁。
- 38) 『所歴日記』(写本), 作成年不明, 国立国会図書館蔵。
- 39) 前掲38)。句読点は筆者による。
- 40) 前掲38)。句読点は筆者による。
- 41) 平凡社編『寺院神社大辞典 京都・山城』, 平凡社, 1997, 348-349頁。
- 42) 『洛陽名所集』(野間光辰編『新修京都叢書11』臨川書店, 1976), 479頁。
- 43) 前掲38)。句読点は筆者による。
- 44) 前掲38)。句読点は筆者による。
- 45) 『京童』(野間光辰編『新修京都叢書1』臨川

- 書店, 1967), 1-88頁。
- 46) 前掲42) 321-486頁。
- 47) 前掲38)。句読点は筆者による。
- 48) 前掲38)。句読点は筆者による。
- 49) 里村祖白を指す。昌琢の次男であり, 昌程の弟にあたる。
- 50) 前掲38)。句読点は筆者による。
- 51) 下中邦彦編『日本人名辞典』平凡社, 1937, 156頁。
- 52) 村田秋男編『類字名所和歌集』, 笠間書院, 1981, 1-487頁。
- 53) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院, 1999, 13-15頁。
- 54) 『机右鈔』, 延宝5(1677)年刊, <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html> (閲覧日2018年1月16日)。句読点は筆者による。
- 55) 前掲18)。
- 56) 『千種日記』(駒敏郎・村井康彦・森谷尅久編『史料京都見聞記1』法蔵館, 1990), 421頁。
- 57) 『千種日記』の3月30日, 北野天満宮から平野神社を訪れた際, 次のような記述がある(前掲56) 123頁)。「かみや川のはしをわたりて平野の御やしろへ詣て奉り(略)又或説にいへるは仁徳天皇のみさゝきなり。この故に藤原家隆の歌に, 〈難波つに冬こもりせし花なれや平野の松にふれるしら雪〉日本紀に, 仁徳天皇は難波の高津の宮にすみ給ひて, 御年八十七にてかくれさせ給ひ, 百舌鳥野の御陵に葬りたてまつるとあり, いかゞいぶかし, 後に此所へ勧請し奉るにや。又の説には源氏, 平氏, 高階, 大江の祖神をあかめ奉るといへり, 延喜式平野神社四座といふこれなり。」
- 58) 『千種日記』の3月30日, 大徳寺を出たのちに次のように記されている。「なを北にゆきて, しちく村をすき, 道わかれて, 左は北山のおくいはや(岩屋)といふ所へゆく, 右は賀茂へ行なり。(略)左にみちよりすこし隔てゝいつきの宮の御ふる跡あり。此齋院は世々の御門御位につかせ給ひてのち, 賀茂の御やしろへ皇女を奉らせ給ひて, こゝにすませたまひしと也。嵯峨天皇の御時智(子)内親王にことはじまりける。(略)千載, 実方の歌に, 〈ちはやふるいつきの宮の旅ねにはあふひそ草の枕成けり〉新勅撰, 京極前関白太政大臣, 〈春はなを残れる物をさくらはなしめの内には散果にけり〉式部の物かたりにもあさかほの宮の事をしるして, 北山の寺といへるも雲林院をなずらへけるとや。賀茂川をわたりて賀茂の御やしろまうて奉る。」(前掲56) 127頁)。
- 59) 前掲21)。
- 60) 随筆家である津村涼庵の『思出草』(1792年)でも, 戸難瀬の滝や冨野の沼を訪れている。彼が訪れたのは, 勝持寺の境内にある冨野の沼である。
- 61) 近世を通じて重版・再版を重ねた小型案内記である『京城勝覧』(1706年)を作成した貝原益軒も, 『所歴日記』を蔵書していた(九州史料刊行会編『九州史料叢書4』, 九州史料刊行会, 1961, 32頁)。
- 62) 板坂によると, 知識人の伝承記事を収集するといった行動は, 近世の初期に林羅山を中心として起こる地誌類の編集や板行と同様のものだという。知識人たちは, 名所の由緒などの情報を収集し, 日本書紀や風土記といった書物を用いて考証を行っていたのである(前掲30) 36頁)。